

支体一覽

特別

14

2236

19



特件  
2236  
19

山標の用

まのしちのり

まのしちのり  
まのしちのり

文体一覽

抱月生

1550

才

上に相圖  
持して下ら  
空拳を持す  
人は長棍を  
盛八種たる  
盛たり、優  
高たるなり  
亦た何の顧  
の一大支族  
延長の勢力  
は近ころ我  
欲するに在  
扱するの謂  
の邦土を有  
以て異邦に  
す、否され  
二十四年九  
(完)  
して記載し

日本は右の敷点を説くは今日に於て最も緊要の事にして各國の通不  
適を研究したる上輸出を謀る時は工業も自然に進歩し殖産工業の發達  
を惹起するや必せり、本邦出品者全体の思想は博覽會場を一大當利場  
に見做し其工業家にして資本と工手間の掛りとして其出品物に莫大の  
定價を附し此博覽會を好機として大利益を謀る者多きは實に迷想の大  
甚しきものと云ふ可し茲に於て是等當業者に向て一番注意を喚へざる  
可からず、抑も海の大博覽會場は各國とも専ら其國の重要物産を賣り賣るを主  
とし尙將來の目的を勉むる所あるより博覽會の出品物はホンの見本物  
に過ぎずして博覽會閉場後の注文を最も大目的とせり、現に一例を舉  
げんよ我國にても先年西班牙國マドリード府の大博覽會の開設あり  
て我國よりの出品中鳥取縣よりの製紙を數ヶ月の後同縣勸業課に向て  
注文し來りし處同縣は充分之を取調へて之が注文に應ずるべく空しく  
其儘に經過せし事あり、又佛國巴黎の大博覽會に於ても堺段通の評判  
よく之を注文せんとする者ありしが是も此際注文先の知れざりし爲め  
其儘となりし事あり、實に是等の事あるや最も好機にして之より引續き  
直輸せんに永世莫大の利益を得しなるべし左れば海外各國人中偶々  
日本品を注文せんに其益方多く横濱商館の知己に依頼し商館は之が原  
産地を開出して三割四割の利を壟斷するも我邦人は徒に傍觀するのみ  
甚だ遺憾ならずや然るに原産地は前年博覽會に於て之と同品を出品  
せしが今博覽會より多數の注文ありし品ありとは更に覺らざるのみならず  
外國商館に利を得るも其の弊あるは最も遺憾とする所  
前項にも如く歐洲各國は其國の出品物はホンの見本  
品にして之に附するに立派な詳報の廣告を添へ入場者あるや誰にも  
之が廣告を附與して跡の注文を懇請す之に加ふるは其會場の入口は實  
に壯觀善美を盡し観覽人をして眼を驚かすに足るものあり其場内に入  
るや別段一大賣品のあるを見ず普通其國の物産なるのみ、然るに本邦  
は之に反し此會を好機として此出品を高價に賣り拂はんと一時目前の  
營利を走り將來の販路上に付少しも頓着なきものゝ如し

上近來の好雜誌といふべし  
○聚芳十種 第六は柳浪子の著はす所目錄を擧げて  
評に換ふ、女夫雛形、紫陽花、やせ鼠、草餅賣、  
○(長風叢書)萬治制法 もと長防兩國の太守毛利家の  
憲法にして制法三十三ヶ條あり元就公以來數百年間治  
平を保てるは實に此制法の正しきに依れりといへば好  
古の人は一讀して可なり發行所は神田淡路町稻垣  
○女學講義錄 第三 諸講義漸く佳境に入り婦女の爲  
めには有益無比の好書となれり講師諸君の盡力察する  
に餘あり中につき尤も目立ちてめでたきは植松有經氏  
の式紙書式あり古法正しく優美に書きなして一點の俗  
氣なきは定て淵源深き書風なるべし  
○女子文かきぶり (小野鷲堂書) 下巻出づ文体書風等  
前巻に就して一層高尚なるを覺ゆ  
○戯中叢書 の内梅川忠兵衛冥途の飛脚、夕霧阿波鳴  
渡の二書は近松貞林子の名作にして度丸善書店より發  
兌せり前者は世間お行はれしものなり後者は廓文章と  
阿波鳴門を合併せし趣ありて趣向面白く出版も自ら珍  
本なりと稱せり惜むらくは前後に脱缺ありて完璧なら  
ざることを

オ  
ニ  
二



文範

岳陽樓記

范文正公

慶曆四年春滕子京謫守巴陵郡越明年政通人和百廢  
 具興乃重修岳陽樓增其舊制刻唐賢今人詩賦于其上  
 屬予作文以記之予觀夫巴陵勝狀在洞庭一湖銜遠山  
 吞長江浩々湯々橫無際涯朝暉夕陰氣象萬千此則岳  
 陽樓之大觀也前人之述備矣然則北通巫峽南極瀟湘  
 遷客騷人多會于此覽物之情得無異乎若夫霪雨霏々  
 連月不開陰風怒號濁浪排空日星隱曜山岳潛形商旅  
 不行檣傾楫摧薄暮暝々虎嘯猿啼登斯樓也則有去國  
 懷鄉憂謫畏譴滿目蕭然感極而悲者矣至若春和景明

波瀾不驚，上下天光，一碧萬頃。沙鷗翔集，錦鱗游泳，岸芷汀蘭，郁以青口，而或長相一空，皓月千里，浮光躍金，靜影沈璧，漁歌互答，此樂何極！登斯樓也，則有心曠神怡，寵辱皆忘，把酒臨風，其喜洋洋者矣。嗟夫，予嘗求古仁人之心，或異二者之為，何哉？不以物喜，不以己悲，居廟堂之高，則憂其民；處江湖之遠，則憂其君。是進亦憂，退亦憂，然則何時而樂耶？其必曰：先天下之憂而憂，後天下之樂而樂歟！噫，微斯人，吾誰與歸！

上高宗封

胡澹菴

謹按王倫本一押邪小人，市井無賴，頃緣宰相無識，遂舉以使虜，惟務詐誕，欺罔天聽，驟得美官，天下之人，切齒唾

罵。今者無<sup>故</sup>誘致虜使，以詔諭江南為名，是欲臣妾我也。是欲劉豫也。劉豫臣事醜虜，南面稱王，自以為子孫帝王萬世不拔之業。一旦豺狼改慮，猝而縛之，父子為虜，商鑑不遠而倫又欲陛下效之。夫天下者祖宗之天下也，陛下所居之位，祖宗之位也，奈何以祖宗之天下為犬戎之天下，以祖宗之位為犬戎藩臣之位？陛下屈膝則祖宗廟社之靈盡汙，夷狄祖宗數百年之赤子盡為左衽，朝廷宰執盡為陪臣，天下士大夫皆當裂冠毀冕，變為胡服，異時豺狼無厭之求，安知不加我？我禮如劉豫也哉！夫三尺童子至無知之求，犬戎而使之拜，則佛然怒。今醜虜則犬戎也，堂堂天朝相率而拜犬戎，曾童孺之所羞，而陛下忍為

之耶。倫之議乃曰：我一屈膝，則梓宮可還，太后可復，淵聖可歸，中原可得。嗚呼！自變故以來，主和議者誰不以此啗陛下哉？而卒無一驗。是虜之情偽已可知矣。陛下尚不覺悟，竭民膏血而不恤，忘國大難而不報，含垢忍耻，舉天下而臣之，甘心焉。就令虜決可和，盡如倫議，天下後世謂陛下何如主？况醜虜變詐百出，而倫又以奸邪濟之。梓宮決不可還，太后決不可復，淵聖決不可歸，中原決不可得，而此膝一屈，不可復伸。國勢陵夷，不可復振，可為痛哭流涕，長大息也。向者陛下問闐海道危如累卵，當時尚不肯北面臣虜，况今國勢稍張，諸將盛銳，士卒思奮，只如頃者醜虜陸梁，信豫入寇，固嘗敗之於襄陽，敗之於淮上，敗之於

滑口，敗之於淮陰，較之前日蹈海之危，已萬萬矣。儻不得已而遂至於用兵，則我豈遽出虜人下哉？今與故而反臣之，欲屈萬衆之尊，下穹虜之拜，三軍之士不戰而氣亦索。此魯仲連所以義不帝秦，非惜夫帝秦之虛名，惜夫天下大勢有所不可也。今內而百官，外而軍民，萬口一談，皆欲食倫之肉，謗議洶々，陛下不聞，正恐一旦變詐禍且不測。臣切謂不斬王倫，國之存亡未可知也。雖然，倫不足道也。秦檜以腹心大臣而亦為之，陛下有堯舜之資，檜不能致陛下如唐虞，而欲導陛下如石晉，近者禮部侍郎曾用等引古誼以折之，檜乃勵聲曰：侍郎知古事，我獨不知，則檜之遂非狼慢已自可見，而乃建白令臺諫從臣僉議可否。



是乃畏天下議已。而令臺諫從臣共分謗耳。有識之士皆以爲朝廷用人。吁可惜哉。孔子曰。微管仲。吾其被髮左衽矣。夫管仲霸者之位耳。尚能變在社之區。爲衣冠之會。秦檜大國之相也。反驅衣冠之俗。歸在社之鄉。則檜也不唯陛下之罪人。實管仲之罪人矣。孫近附會檜議。遂得參知政事。天下望治。有如飢渴。而近伴食中書。漫不可否事。檜曰。虜可講和。近亦曰。可和。檜曰。天子當拜。近亦曰。當拜。臣嘗至政事堂。三發問。而近不容。但曰。已。令臺諫侍從議矣。嗚呼。參贊大政。徒取充位如此。有如虜騎長驅。尚能折衝禦侮耶。臣竊謂秦檜孫近亦可斬也。臣備員樞屬。義不與檜等共戴天。區々之心。願斬三人頭。竿之藁街。然後鞫留。

虜使責以無禮。徐興問罪之師。則三軍之士不戰而氣自倍。不然。臣有赴東海而死耳。寧能處小朝廷求活邪。

前赤壁之賦

蘇東坡

壬戌之秋。七月既望。蘇子與客泛舟遊於赤壁之下。清風徐來。水波不興。舉酒屬客。誦明月之詩。歌窈窕之章。少焉。月出於東山之上。徘徊於斗牛之間。白露橫江。水光接天。縱一葦之所如。凌萬頃之茫然。浩浩乎如馮虛御風。而不知其所止。飄々乎如遺世獨立。羽化而登仙。於是飲酒樂甚。扣舷而歌之。歌曰。桂棹兮蘭槳。擊空明兮泝流光。渺々兮予懷。望美人兮天一方。客有吹洞簫者。倚歌而和之。其聲嗚々然。如怨如慕。如泣如訴。餘音嫋々不絕。如縵。舞幽

壑之潛蛟泣孤舟之<sup>發</sup>整婦蘇子愀然正襟危坐而問客曰  
何為其然也客曰月明星稀烏鵲南飛此非曹孟德之詩  
乎西望夏口東望武昌山川相繆鬱乎蒼冥此非孟德之  
困於周郎者乎方其破荊州下江陵順流而東也舳舻千  
里旌旗蔽空醜酒臨江橫槊賦詩固一世之雄也而今安  
在哉况吾與子漁樵於江渚之上侶魚鱉而友麋鹿噫一  
葉之扁舟舉匏樽以相屬寄蜉蝣於天地渺滄海之一粟  
哀吾生之須臾羨長江之無窮挾飛仙以遊遊抱明月而  
長終知不可乎驟得託遺響於悲風蘇子曰客亦知夫水  
與月乎逝者如斯而未嘗往也盈虛者如彼而卒莫消長  
也蓋將自其變者而觀之則天地曾不能以一瞬自其不

變者而觀之則物與我皆與盡也而又何羨乎且夫天地  
之間物各有主苟非吾之所有雖一毫而莫取惟江上之  
清風與山間之明月耳得之而為聲目遇之而成色取之  
無禁用之不竭是造物者之無盡藏也而吾與子之所共  
適客喜而笑洗盞更酌肴核既盡杯盤狼藉相與枕藉乎  
舟中不知東方之既白

月日愈雨、作天地ノ瀆、大江ノ瀆、日月ノ所、物  
 アリ焉、蓋シ常鱗凡ノ品、曩匹儔ニアラハレ也、  
 其水ヲ得ル風雨ニ變化シ、天ニ上下スルモ、難カラザレ  
 ナリ、其水ニ及ビサレ、蓋シ尋常尺寸ノ間ノ高、山  
 大陵、曠塗、絶壁、險ノ之カ、間隔ヲ為スナキナリ、  
 然カモ、其究、涸自ラ水ニ致ス、能ハレテ、獨、獺ノ、笑  
 トスル者、蓋シ十三八九矣、如シ有力者、其究ヲ哀  
 テ、而シテ、之ヲ、運、輔、こ、バ、蓋シ一、拳、手、一、投、足、ノ、勞  
 ナリ、然レ、氏、是、ノ、物、ヤ、其、象、ニ、異、ナ、ラ、負、フ、ヤ、  
 且、ウ、曰、ク、沙、泥、ニ、爛、死、ス、ル、モ、吾、寧、ロ、之、ヲ、樂、ム、  
 若シ、首、ヲ、俛、シ、目、ヲ、帖、シ、尾、ヲ、搖、シ、テ、而シテ、憐  
 ヲ、乞、フ、者、ハ、我、志、ニ、アラ、カ、ル、ナ、リ、ト、是、ヲ、以、テ、有、力  
 者、之、ニ、遇、ヒ、之、ヲ、熟、視、ス、ル、モ、覩、ル、魚、キ、ガ、苦、キ、ナ、リ、

和文体

其死具生固ト知ル可ク然レテ今又有力者其  
前ニ當ルモノアリ矣 聊試ニ首ヲ仰テ一ニ  
鳴蹄ニ馬庸詎スゾ有力者が其究ヲ哀デ  
而シテ一挙手一投足ノ勞ヲ忘レテ而シテ之ヲ清  
ニ轉セサルヲ知ラシ乎 其之ヲ哀ムモ命ナリ其  
之ヲ哀ツルモ命ナリ 其命ニシテ知テ而シテ且  
之ニ鳴蹄スルモノ亦命ナリ 愈今ハ實ニ是ニ類  
スルモノアリ 是ヲ以テ再蹠愚ノ蹠ヲ忘レテ而シテ  
是ノ説アリ 馬窓下其亦之ヲ情察セヨ

紀貫之

……傳ニ麻理は最のまぢなえたりとも  
……し。たごはあけける女をいへていたづ  
トよ心を動かしが如し 在平業平は其心あ  
りて言葉をいはず 周はあける花の色をいへて香  
ひの残れぬが如し 文屋康平ははいたとこも  
そのまぢ身うおはさず といふあまのよの夜  
またいむがさし 宇治山ノ傳喜撰ハまじ  
あまかみしてすめをはせたりあま  
いほ秋ののをもいふあはれいほ  
へまめいよめる歌おほくさ文おほれ  
まれを道よほしこまおほくさ どのか  
町の方への夜通ひひめつらおれたる  
あはれなるやうを強よかきずいほ  
よき女のちやめる所あるまはたし強よ  
かみぬは女の歌をたれをたたくし大伴  
の里主はそのさまいやしほいほたきい  
へるやまのそまのかけまやまめかめ  
しほほかの人し真衣まめゆる物べ

和漢折衷体

おふるかざぶのはひらりあつしはゆし  
まげと本の葉のまじりおほられど  
歌しのうおまひしてそのまじりあつし  
るし

鴨長明

行と川の流は絶へずし一かまもとの水  
あがず、淀みも浮ぶらうたはは且清く  
且つ結ひてくしとまじりあつし  
世の中あつしとすみあつしまたこの  
如し玉敷の都の中は棟を并ぶ  
を争つる節と申し人の住居は代を  
経て盡せぬものなれど、且をまじり  
と穿ぬれど昔のありし家はまれば  
或はまじりあつしとすみあつし  
大家城ひこや家となる住むも之を  
い、唐もわらわら人もねむれど  
見一人は二十人中二僅に之をた  
朝に死し、生るなむひ唯水の泡  
不似たりける知れず生れ死ぬる人  
まじりあつし何れかまじりあつし  
やと、誰が唐もをばつし何と  
か目を悦はむむる、夫のまじりあつし  
常を争ひむるまじりあつし朝顔の  
二里たり、或は露おちて花のま  
り、残るまじりあつし枯れぬ、花  
花は暮みて露は清く、清くまじり  
つともゆめへを待つまじりあつし

無名氏

今昔物語

漢文和譯体

得陽のほとり江上の秋、秋風客を送つて  
一葉のあゝあゝをわさる船めりちり  
酒をよめて自居易は、月にくらぶら  
あまの原八重の、ほろのま遠く千里  
の外もくもたつて、水のよもよも深き  
やみもは、霧のちかよ、いりた下  
もゆるし、いりたのは、の見えりめし  
昔のうち浦を、おとふ、秋風のあまか  
り、れと琵琶のおか、お月つかたよめ  
い、べの、四弦一聲すれば、ともうた  
も、ゆるし、れにたよみぬめの浦のあま  
も、舟つかたなる風よ、あま、いり

韓非子

舟楫の、時吾客至、有司礼ヲ請フ、桓公仲文ニ  
告ケヨト曰フ者ニタビ、而優笑テ曰ク、易カシク  
ルヤ、一モ仲文ト曰クニモ仲文ト曰フ、桓公曰ク、吾聞  
ク人ニ君えん者人ヲ奉るニ勞シ人ヲ使フニ佚ト、吾仲  
文ヲ得ん已ニ難矣、仲文ヲ得んノ後何為目、易カシク  
シ乎哉ト、或曰、桓公、優ニ應ル所、吾人者、言  
テラシムルナリ、桓公人ニ君えんヲ奉るニ勞スト為ス  
何ゾ人ヲ奉るニ勞トヤトヤ、伊尹、自以テ宰ト為  
テ湯ニ于メ百里奚、自以テ庸ト為テ穆公ニ于ム  
庸ニ辱ル所ナリ、寧ニ羞ツル所、羞辱ヲ蒙ラ  
而ノ君ニ接ス、賢者ノセテ優ルヤ、意ナリ、然レ  
則人ニ君えんモノ、賢ニ逆フヤ、而モ笑、賢ヲ奉ル  
人、事ヲ難クシ、且ツ官職、賢ニ任ル所ナリ、  
爵祿、切テ賞ル所ナリ、官職ヲ設テ爵祿  
ヲ陳シテ、而士自ラ至ル、人ニ君えん者、寧ノ其ノ勞

セニ哉人ヲ使フ又佚之所ニ執ラサレテ人王人ヲ使  
フト臣民必ズ度量ヲ以テ之ニ準シ刑若クハ以テ之ニ參  
ヘ事ヲ以テ之モ法ニ過ハレバ則チ行ヒ法ニ過ハレバ則チ止  
即其言ニ當レバ則チ賞シ不當ニサレバ則チ刑若クハ以テ臣  
ヲ收メ度量ヲ以テ之ニ準下ニ此孰クカラサレテ人ノ君  
若ク馬ノ佚セシヤ人ヲ牽クニ當セズ人ヲ使フ佚セズ而  
シテ桓公人ヲ牽クニ當シ人ヲ使フ佚セズト曰フモノハ不  
然且ツ桓公管仲ヲ得ル又難管仲其夫ニ死  
セズシテ桓公ニ歸シ鮑叔官ヲ輕シ能ク護ラテ而  
シテ之ニ任ズ桓公管仲ヲ得ル又難カシヤ明  
笑已ニ管仲ヲ得ルノ後愛ツ處カシ易カラシ哉  
管仲周ラ且ツ之ヲ以テ周ラ且ツ天子トシ七  
年成王仕ミシテ之ニ授ク政ヲ以テス天下ノ為メニ  
計ルハアツクナリ且ツ我ノ為ニ元也夫シ子ニ奪テ  
而シテ天下ヲ行ルニ難クアモリハ必ズ死君ニ背テ而シテ  
讐ニ事フ死君ニ背テ而シテ其讐ニ事フルモノ  
ハ必ズ子ニ奪テ而シテ天下ヲ行ルニ難クアモリハ必ズ死君ニ背テ而シテ  
而シテ天下ヲ行ルニ難クアモリハ必ズ死君ニ背テ而シテ  
フニ難カラズ矣管仲ハ公子糾ノ臣也桓公ヲ殺ス  
テ謀ラ不能直君死シテ而シテ桓公ニ臣トシ管仲  
之取舎固ク且ツ執ルモ未可知也若シ管仲ヲ以テ  
大賢ナラシムル也且ツ湯武ト為セ湯武ハ桀紂  
之臣ナリ桀紂乱リテ而シテ湯武之ヲ奪ス今桓  
公易クハ以テ其上ニ居ル且ツ桀紂ノ行クニテ湯武  
ノ上ニ居ル桓公危矣若シ管仲ヲ以テ不肖ノ人ナ  
ル也且ツ由常ト為セ由常ハ簡公ノ臣ナリ而シテ  
其君ヲ弑シ今桓公易クハ以テ其上ニ居ル是簡公  
之易クハ以テ由常ノ上ニ居ルナリ桓公又危矣管

近文雅俗混雑

仲由公且ミララシヤ亦以明矣然心湯武ト田  
常トスル未ヲ知ル者多シ湯武スル桀紂  
之危アリ田常スル簡子ノ乱アリ也仲又  
ラ得ルノ後猶云室ヲ處カシ見カラス哉若相云  
ノ管仲ト任スル心スバラ欺カスヲ知ラシムル也是  
主ヲ欺カス臣ヲ知ル也然レテ不欺主ノ臣ヲ知  
ルト臣氏今相云管仲ト任スル事ヲ以テ豎刀  
易牙ト借シ忠信シテ尸ヲ食ク而莽々相云  
臣ノ主ヲ欺クト主ヲ欺クヤト知ラシムル也明矣  
而メ臣ト任スル彼ガ如ク其レ事ナリ故曰相云  
ノ闇主也

赤田思軒

綿里ノ家トトニ井アリ水多クシテ久目干キモ  
涸レズ味微シテ鉄氣ヲ帯ヒス氏清別れん  
ナシ盛夏ノ日晝ノ永キニ童子ハ大傳ヲ讀ミ  
厭キテ葡萄架下ニユキ下女トモノ澣衣ヲ持  
ツルコト立寄ルコトト些ノ南浩ヲ交ヘ復タ  
去リテ井ニユキ手ツカシ縋ラタグリテ燒ツキ  
痕縦横セシ大茶碗ニ一杯ノ水ヲ汲ミ取リ  
ラシク啜ス今ヤ瓊瑤ノ盞玲瓏ノ水一指呼  
ノ向キ来ル而シテモモ憶フ此在ラズニテ彼レ  
在リ

山田美妙齋

近文言文一致体

清々として優美でその受取のいふのは六  
七又のササと浦の青島をでいしありまじや  
その肩のよだ織と薄とその疑のよだ肥  
えて固まらず薄絹の類と後麗乃泉  
をたへてこぼさうとは思ふが受取の



血体文

露をこぼす有様を見ては誰か一片はな  
めて高きなる愛情を起し居るに  
まじりつゝ有の紅を解りて揉碎りて  
居る波の毛の余を味らふといふ有様  
で反射の綾模様を浮織りまゝに居る  
管屋の板びきし志ぢり昨夜過る春雨  
の足跡をば銀象散と見立てられる  
蝸牛のぬめりには見せ居るがそれ  
尚水際立つて見える古今の美しき余  
情は伝へてす

こ宅礎は即

洛陽ノ昔年往々ミシテ奇警ノ語アリ貪夫ハ財ニ  
徇ヒ烈志名ニ徇ヒ夸者ハ權ニ死シ衆庶ハ生ヲ  
憂ヒト言ハル豈人幸ノ適年ハ非ズ鉄ニ馬  
目ニ白水埒物南無金銀七福神宝船ヲ視  
テ湖漣ノ層々シク羨シ箝語ヲ聴テ泉貨  
ノ銚々シク想ヒ累積シ重(因)宜ニテ浮リ死期  
ニ逼リ虚室ヲ攬シ絶竹シテ柄ホ瞳目シ  
得テ人モ鮮サナリトモヤ念フキモハ身ヲ名ナ  
リテ名未代ノ人ノ世ノ中孔子モ世ヲ没シテ名  
ノ称せしラシラ疾シ魏ノ文帝モ生キテ七尺ノ形  
死ニテ一棺ノ土唯名ヲ揚クテコト朽チテハキト  
宜シトモ實ニ名ヲ揚ケ名ヲ傳ふる為ノ何ノ危  
険カ冒ル可カラザレト實悟スモノ鮮サナリ  
トモトヤ驕ルモノ久シクハコト驕ラヌモノ  
モ夢ノ世トモ宜シ事ヲ行ク確ニ居ル日月  
ノ皓然トモ如クスシト決意スルモノ鮮サナ  
リトモトヤ世ノ中ハ喧フテハコト寢テ起テ

中古文

サナ直来は無茶苦茶トナル。備前飲ノ流々ハ  
一寸先ハ周ノ夜ト強テ。寛政ヲ改メシメ、鮮サ  
ナリトモヤ。嗟呼矣ッ。鮮サナリトモヤ。流々タ  
リ天下是此徒輩ノ喧嘩奔狂ニ外ナラス。

平家物語

仲國彦長は馬賜はりて。明月ノ鞭を奉  
げ、西を指しごと歩ませける。が麻鳴とけし山  
と云けむ。嵯峨此あたりれ。秋れ頃。ささそ  
あはれ。る。賞えけり。片折戸。た。家見  
つげ。は。あ。れ。も。や。お。は。し。と。ん。と。控へ。聞  
き。け。れ。ど。し。琴。彈。と。斬。日。た。の。の。り。か。れ。丸  
堂。あ。と。り。も。參。り。治。へ。る。と。か。や。や。和。如。堂。と  
始。めて。堂。と。自。回。れ。と。も。が。督。れ。敷。り。以。な。り  
女。房。た。る。も。あ。ら。り。け。り。空。り。り。解。り。来。り  
た。り。又。は。參。り。参。り。人。より。あ。の。く。馬。の。り。り  
し。具。子。の。り。何。地。の。か。迷。ひ。り。の。な。や。さ。田。の  
り。り。の。處。の。玉。地。の。り。ぬ。身。を。隠。す。り。家  
の。り。り。の。り。の。り。と。案。下。頼。ふ。り。ま。り。や。法  
輪。の。程。近。う。け。れ。ハ。月。丸。を。り。後。は。れ。

◎ 箏曲の歌

心畫の曲か

第二

第三

第四

第五

あまのくにのまはるあまのこゝろを  
かみかみしてははるしあまのこゝろ  
かみかみしてははるしあまのこゝろ  
かみかみしてははるしあまのこゝろ

第六

あまのくにのまはるあまのこゝろを  
かみかみしてははるしあまのこゝろ  
かみかみしてははるしあまのこゝろ  
かみかみしてははるしあまのこゝろ

天下太平の曲カ

第七

あまのくにのまはるあまのこゝろを  
かみかみしてははるしあまのこゝろ  
かみかみしてははるしあまのこゝろ  
かみかみしてははるしあまのこゝろ

第八

あまのくにのまはるあまのこゝろを  
かみかみしてははるしあまのこゝろ  
かみかみしてははるしあまのこゝろ  
かみかみしてははるしあまのこゝろ

第四

はよのいのちのちぶざれ、ねほりしつゝのひとそで、まじか  
ちぶぬちぢいさちり、らるあかそぬえけれ、

第五

あやふのふみぢいさちり、かかあふのね、神の御心  
あひそめて、まじさちらさちら

第六

あまのついでに、ちたは、ちちちひぢいさちり、まじれ  
らるちぢいさちり、まじのちちちあち

譯歌第一 (雪隠衣裳花想春日拂掃露華濃)

ひぢいさちりあまのちぢいさちり、まじのちちちあち、  
はちちのちぢいさちり、まじのちちちあち、

第二 (若洲春玉少頭見、倉向瑤臺月下降)

よまのちぢいさちり、まじのちちちあち、まじのちちちあち  
のちちちあち、月もあまのちちちあち

第三 (一枝濃艶露疑香、柳雨巫山杜宇鳴)

くれちるれ花のちちちあち、まじのちちちあち、  
まじのちちちあち、まじのちちちあち、

第四 (借問屋名誰得也、可憐花葉傍)

ちちちあち、まじのちちちあち、まじのちちちあち、  
まじのちちちあち、まじのちちちあち、

第五 (名花妖冶西京歌、常得春玉帯笑靨)

ちちちあち、まじのちちちあち、まじのちちちあち、  
まじのちちちあち、まじのちちちあち、

Handwritten musical notation on a single staff.

Handwritten musical notation on a single staff.

Handwritten musical notation on a single staff.

第五頁

Handwritten musical notation on a single staff.

第六頁

第七頁

Handwritten musical notation on a single staff.

第八頁 (一名東雲の曲)

第九頁 (解釈者同世限根、沈香亭北倚園手)

◎ 種邦士良の俗歌韻活枝葉

韻は三韻ともあり即アは一韻イエは通して一韻ウオ亦通して一韻  
チ図示せんアイウエオ

歌の雅俗は用法のまうし韻格は別物なり俗歌も韻格に正変あり正格には歌法(助緯を除きて韻を押しよめ)待法(向未押韻をよめ)とありて一韻到底と種韻の別あり変格には復奏三韻、抑韻あり俗體は反韻(即助歌)の如きは古事紀の天鈿女命の歌なり(以下歌の韻は○一韻・●二韻・△反韻ともあり)ひきふたみよ、いづもかち、やまのたも、とちよらぶ。

今様 祇王の歌ひ

蓬草山は千とせむ、萬草千杖うきぬれり、  
木の枝を、産すらし、いはの上なる、葉あふぶ。

佛のよの

君をば、見とまは、千代も、母あふ、姐も松、

おもへの池も、葉園に、産すも、ぬれぬ、遊花

世哉地、松葉、松葉、(松葉)

目あ、若く、若く、若く、

松の、葉を、葉を、葉を、

目、草の、ひき、  
孫、ひき、

園の北の ちんちん

ちんちんーんれか。 ちや野のあま

ちんちんせつめい。 めれちる

しんがイナ (前敷後律の二用は)

潮まぶし (前敷後律の二用は)

いたまごーい。 直哉れちち

草サ浦さこま。 ちまーせ

回やカ

小流曲

坂ほてり。 ちんちん

あひの土ち。 あまぶら

また

吉田首尾は。 ニ階ちまねく

ちかゝ麻のよの。 ちんちん

伊勢音歌の

伊勢は律い。 律は伊勢い

尾尾名古屋な。 ーるい

第の曲

あまはちんちん。 あか牙はちんちん

もつちんちん。 白紙の

片機かすい

あまはちんちん。 ちんちん

ちんちんちんちん。 おーんちんちん

また



見れば見ぬぞ。 障きしやまを。  
ちぎるあがちを。 くらめ我し。  
また

ふはのせき。 いたまうて。  
月のわのち我。 やまけれ。  
ぬめふり。 (おぼのの)

④ 丑が来ぬぞ。 物らなけり。  
あけぞ枕。 ちかはあけり。  
ながふし。 (え縁に)

また 月まおちる。 音もさけは。  
わがたしめた。

④ おひみたれ。 あまやのきよ。  
あまのたえひ。 ろふほちる。

また 海りえふて。 世の中見れば。  
あはの晴戸。 浪もあけり。

本調子  
竹み葎。 ちちよけれど。  
まは仇の 餌き。 ちちを。

~~ソ~~ ソー。 (イカ。 実ニホニミウジヤエナ)  
また 立田川。 紅葉をちちり。  
あたをちまき。 浮るをちちり。

おんやさしくこゝろやうらやう

また

かゝるおもしろいかな。  
あかき道のおもしろいの  
なれるまよひのよ。  
ふとほちのり。

ニトフ

むかふ通るは。  
笠がやう似た。  
清十郎がなにか。  
菅がまきか。

また

春のうらみひす。  
花を枕しよ。  
叶をかく下し。  
ヨイ　く　く　く

また

鳴こくれるな。  
流くをさくさく。  
あけのこころ。  
あけのこころ。

之下り

船は出こころ。  
茶屋のまよひの。  
出こころぬる。

また

きりきりさめたれ。  
あなちもあつた。  
のぼり。

また

あつたのよ。  
まわればはしあつたよ。

浦こせうら。 ちよひ。

都々一の句々韻者の教法

ありい〜いと かよあたはては

はせの障子も あけはちよひ。

二首無韻者の教法

関はとまゝにぬ 君が代ちよひ。

あせら人目が 誠えにちよひ。

二句中韻者の教法

おまへ侍人の 李杜と気ど。

魚舟こころもが わーやすちよひ。

三首句々韻者教法

まはつかれし 黒白のま。

わたしやひさび 待れ山。

二句二句無韻その教法

おもふがらんぞ。 とほけと暮せ。

あつちほせな 五十ちよひ。

一換韻の教法

思ひのたけもな 三すちよひはせ。

ゆしのあゝみと びいこ見せ。

律韻の律法

筆のいはせたり。 飯かちよひ。

あまこ嬉しい。 あまの川。

二韻の前後律中散者

新夕持つよみ 漢書を聞き。

いつかみん海をーと見たい。  
換韻の前後律五用者

花を折るもいと 言ひたつたれよ  
千年のすまじと ちとるも皇

前後散中律者

のむといふ字を 分拆すれば  
二人は といふもけ

及韻格

自由な世身よ 自由なあつて  
それと押さる 寐やの病話

また

花の浮れりや。 下戸きく踊る

況んや 言ふは 折こもや。

その口四声三十韻で 百二韻ちりて 韻格を以て  
こ切韻すれば十韻と有り 又の抑身を約め 正  
吾を風れば 支度歌の之 韻め好る

うきね

朝妻換校

うきね床の言ふは抱ふる涙あり女めては夢のちりよ  
 ましろめばみーかよふしほそきき音つれは夜が  
 明けた神がうつゝいよれ佳くうき身北浦のせをき  
 ても傘は長うして書はひねりてまきし夜は  
 ねまよふし沈むまき大廊をおつおぬや指のそ  
 よとね風の契りおねどはかちやな夫がふかき  
 かきれしう涙の目かられて響くふかける燈火は  
 かたかたのりたる曉れ鐘の声つゝいよききこは  
 とかちやなぬせの中よふつと思ふまゝいよ思入  
 思くこゝ又すこたかちやよふかちやねん  
 六の葉とちまれまゝいよせとせとちやねん後のせぬ

のうきな運見この後れはふらふれはかほを物をも  
ば思はしものも昔事やな今れ身也

あまきりよ舟

英一蝶

うきを境もむ交さうちこそ慰めりぬる心ア、  
うつちや留一つた入れその水も流れりし  
あをを見しうつ小きれしやまきし涙は誰かあ  
ふあなれと袖もとこし

室家

駒とめて袖うちはらふか竹ももし徳節れ  
わたりのおきれ夕とれ

実教

よふれれわふれにまふたの心よあられ

たばくる奪強れをれ京

たけらひ下

おちぬきす霞もて夜をあらしはまれの  
と眺めしり

月もあふまきよしのははるもふらぬ  
ひきはえれきり

名の一風はしり言可なり歌しり  
人はあつちりちと

あまきりよ舟

Handwritten cursive text at the top of the page.

いふいふ井筒のやうし  
あひ見まほし

ちれつたふりし  
たれつたふりし

いふいは仲し  
裁ゆりむ

おのづから  
おのづから  
おのづから  
おのづから

城ちちむら力あり

かゝるし  
かゝるし

草はかた  
草はかた

今様

君を侍りて見れば、千代も逢ぬくし娘も松  
お前の世を、多岐の國よ、産まむもれを、おとされ

君はまの代かおとせよ、われふもは後まきあはせん  
たのむはよはひも、さしはひもまの世なり

六二、南都寺の物後佛の歌一歌

佛の世のしは凡まなり、あれふもつひは佛なり  
自身佛性具しなま、賜つるんたうたこさよ

七、原手盛之喜記はまの歌一よ

春はけしめの梅の花、よらさひ開けておぼたまるる  
みたり一何の落す身、しとけたる只今うれ

七、原手盛之喜記はまの歌一よ

信儀、あはなる本常路川、君におおれは深ければ  
けし納をぬりしつ、たぬぬれちりしつけれ

七、長の本手盛之喜記

あはなる世を、妻を死ねば、浅草のまきかたりしつる  
月の光はももあはして、秋風のまき自身まはむ

原手盛之喜記

像を侍りては、世師の世なり、なほはるるを、  
よらつるのやうに、しつるに

熊野の権現は、たぬきを、けしつる、おれたまふ  
わのの浦、しつる、と、まふけしる、若王子



泡知声聞くはあゝ、よろき身すゝりも今さらむ  
われはそよの佛うと、たゞうき多うる人今もあれ入

木の枝際よちよれ、ちよきのほろー身もーめと  
梅の枝かきよまきつれ、春のきりぎりすのれ

ち也、 柳屋抄付集

あれよちよーまぬぬむ、思ひつらとすき長きれ  
今世西方極楽也、 法院のほろも今もよ入し

十訓抄

竹のよきもよあはれむる、ゆゑもかたあはれむる  
人のよきもよあはれむる、身もあはれむるこゝろ

よきもあはれむる、あはれむる、あはれむる  
あはれむる、あはれむる、あはれむる

あはれむる、あはれむる、あはれむる、あはれむる

あはれむる、あはれむる

あはれむる、あはれむる、あはれむる、あはれむる

あはれむる、あはれむる、あはれむる、あはれむる





河原右直 つかれくの一 此よりすり 流るる つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
老若全き つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
行平 立わかれい つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
業平 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
伊勢 住れはれはれ つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
素世 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
文尾津彦 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
大は重し つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
まわぬ つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
うき大直 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
占信云 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
兼由 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一

原宗子 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
躬直 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
もき つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
坂上直 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
若造親 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
記左 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
阿多直 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
貴之 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
かま屋老文 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
竹床 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
七近 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
参御守 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
示書 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一  
壬午七見 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一 つかれくの一











花ナ

花ナ

はる

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ

花ナ





何となく袖をみれば  
心なき人はしむたか  
秋風のあはれを  
いそねも露をわらひ  
あふ月のけりた  
あやの棟床の下の  
里にはいそは  
当り来る塵の  
人志れす  
粟田山  
強あつた  
照月

何となく袖をみれば  
心なき人はしむたか  
秋風のあはれを  
いそねも露をわらひ  
あふ月のけりた  
あやの棟床の下の  
里にはいそは  
当り来る塵の  
人志れす  
粟田山  
強あつた  
照月

○ 此の山は古くは天竺の山と云はれり  
○ 月夜に望むれば雲霧の間に  
○ 夕陽の影を照らす如く  
○ 大なる山に上りて  
○ けしきもまた別なり  
○ 人々は此の山を  
○ 喜ぶも其の  
○ 可事も亦た  
○ かなしき事  
○ 是の山は

○ 山は古くは天竺の山と云はれり  
○ 月夜に望むれば雲霧の間に  
○ 夕陽の影を照らす如く  
○ 大なる山に上りて  
○ けしきもまた別なり  
○ 人々は此の山を  
○ 喜ぶも其の  
○ 可事も亦た  
○ かなしき事  
○ 是の山は



名句集 (既止诗话中)

洗兵條支海上波，放馬天山雪中料。  
庸箭如沙射人甲，五月陸子影。  
笛奏龍吟水，箏鳴鳳下空。  
轉大輪，女婚戲董共團作。  
誤換手，謝世棧一風。  
淡々如沙塵，一舉手弄清淺。  
二日吹倒山，白波高於瓦官閣。  
并皇刑，朱門酒肉臭，路有凍死骨。  
雲生，决皆入帝鳥，七星在北戶。  
河漢声西流，声吹鬼神下。  
勢寬人代東，身驚出死樹。  
技老湫，反思前夜風雪急，乃是蒲城鬼神人。  
元氣淋漓，滴瘴猶濕，直幸上訴天。  
雁臣百摧，朽骨龍虎死，里入太陰雷兩車。  
石無石子地裂，四更山吐月，殘夜水明樓。  
皓水

菴自照水，宿鳥相呼。  
江山有巴蜀，棟宇自齊梁。  
星臨万户動，月傍九霄多。  
吳林之東南，斯乾  
坤日夜浮，五更鼓角聲悲壯。  
錦江春色來天地，玉墨浮雲變古今。

雨月物決す

菖花の約

青々たる春の柳、<sup>みづの</sup>菖園に植ふ正春のれ、交りは軽舟の人と結ぶ  
正春のれ、陽柳茂り易くとも秋の初風も傳へぬや、<sup>舟</sup>軽舟の人は  
交り易くして亦運かたり、陽柳茂る春の舟もれとも軽舟の人は  
日終て訪ふ日柳し

花のわくし、此物決のころ  
大向まゝく、あま力前  
年の如く、あま力前  
子しあ、あま力前  
屋の物、あま力前  
種子の白、あま力前  
つ勢、あま力前  
いよめる、あま力前

政と親入子入加三も子け生れ付きこの 跋  
る 鎌 ぐりしありしが先きう日のたろかかれ  
祀父の傍り、暎まよ子は中ひよとて 杖  
の 纏りて根尾返の けよむ生 枯け 岨 ば  
根の 蒸ち入りて死しぬえれし 政を  
口をとり乱れし人の 角むるを 押り  
屋の物、あま力前  
種子の白、あま力前  
つ勢、あま力前  
いよめる、あま力前  
一言二言 清り合ふは 友は 熟睡ひ入り  
こ 軒の 声のこし言葉うけ 養くする  
も 我も 疲れてうとくと 睡気まもが不



自然何事か  
しるは又物か  
さうしつち  
さうしつち

同行者の大影のはの時く  
瞬ハバ這はき何事か怪一見  
の片隅より葛の張りの引  
指ほどの太さ一箇の光  
射し出下見えある裡の中程  
と映る一次の間もほほほ  
うつゝと例一のあつても  
と見せしと思ひ極はり幾  
一見せしと思ひ極はり幾  
くすの可の可の閑の閑  
見一遠くは我知し身も  
の方の近景

高安の女、後路の別れ、甘茶園の湯

紐衣の只後、荒草山の生石

凡信又選、女取之鏡

水滸西遊之金瓶

狂歌狂言集 巻十五



